



に反乱を起した十二方村の「**脇本**」に比定され、また中世には安東氏が城を築いて本拠となした所である。脇本は藩政期には街道の駅場となり、乗継馬が常備されていた。脇本から羽立へは生鼻崎から崖下の海際をゆく道と茶臼峠を越える二本の道が利用されていた。

羽立は北浦道への分岐点であるが、脇本から羽立に出ず、田谷沢から寒風山の南麓を過って滝川に向かう道もあった。

男鹿には「絹節」という藩政末期の精緻を極めた全三冊の地誌記録が残されている。船越（鈴木家所蔵）嘉永五年（一八五二）、船越の郡方勘定役鈴木重孝が編纂したこの男鹿地域の村勢要覧は、「菅江真澄遊覧記」（男鹿の五風）と並んで当時の街道を含めた半島の様子を知る上で大変参考になるものである。



- ①「秋田街道風俗絵巻」より追分
文化期（1804～1818）に荻津勝孝が描いたと伝えられる。画面左右に続く道が羽州街道で中央の追分から下に延びる道が男鹿道（街）道（秋田市立千秋美術館蔵）
- ②追分の三十三番観音碑（天王町追分）
文化2年（1805）建立。現在の追分三叉路より県道すぐ右側のお堂に残る。石碑右面に「従是男鹿道」と刻字
- ③北野神社四力士像（天王町上出戸）
本殿は宝暦11年（1761）の建立。力士像などは久保田の仏師喜佐衛門の作伝。①の絵巻には「天神堂」と記す
- ④東湖八坂神社（天王町天王）
この社が現在地に遷座したのは康平3年（1060）と伝わる。祭典統行人事の「牛乗り」や「蜘蛛舞い」は有名

- ⑤鰯（ボラ）塚（天王町干潟）
干拓前の八郎湯漁業の中心魚鰯の供養碑。安政6年（1859）から昭和26年にかけて六基建立されている
- ⑥渡部斧松生家正門と村法碑（若美町渡部）
渡部斧松は江戸末期の篤農家で、渡部村の開拓や秋田藩内各地の新田開発などを行った。五ヶ条を基本とした渡部村法を定めたものが石碑の四面に残る
- ⑦野石の青面金剛像（若美町野石）
八幡神社隣接の墓地に残る。文久3年（1863）の道標で左下に「右舟こし道」と刻字、右下は判読不能。ここは北浦方面に続く「殿様街道」の分岐にあっていた
- ⑧脇本城跡（男鹿市脇本）
戦国時代秋田を領していた安東氏の一城。生鼻崎の台地上に築かれた平山城だが、地震や波の浸食で南部は海中に崩落。現在、発掘作業が進められ脇本城の全貌の一端が明らかになっている



歴史の道をゆく

男鹿街道(1)

追分から羽立までの男鹿道



男鹿街道は、金足追分で羽州街道から分岐し、天王砂丘をたどり船越水道を越え、寒風山麓の脇本、羽立から船川や北浦など男鹿半島の諸集落を結ぶ道として機能していた。

また、船越から八郎湯西岸の払戸、野石を通じて能代に至る道は、通称、能代道や湯西街道とも呼ばれ、この道を逆に能代から船越に辿る場合は男鹿街道と呼んでいた。ここでは、追分から戸賀や門前を結ぶ道と、船越から能代を結ぶ道を合わせて紹介する。

追分は土崎湊宿と大久保宿の中間にあり宿駅ではなかったが、湯西街道などの交通量の増加にともない宿場的な場所となっていた。追分三叉路を男鹿方面に入つてすぐ地藏堂がある。ここには文化二年（一八〇五）に建立



された三十三観音第一番石塔があつて「従是男鹿道」の文字が刻まれ、「男鹿道」という呼び方があつたことがわかる。

追分から天王に向かう旧街道には、かつて美しい松並木が残っていたが、今はすっかりその面影を失つた。天王砂丘は飛砂が激しく、藩政期、栗田定之丞や天王村の児玉庄三郎らによつて防砂林として大量の松が植林された所であつた。

上出戸は享保以前塩屋出戸村、あるいは塩浜出戸村といひ、古くからの塩釜（製塩）が盛んで、隣接する下出戸（船越出戸村）と共に「魚漁又ハ塩ヲ焚テ渡世」（児玉家文書）とし、藩から塩釜免許を得て役塩を上納していた。また上出戸には藩内十一社の一つとされた菅原道真を祀る天神社、北野神社がある。

ここから街道は慶応三年（一八六七）に開拓された二田村を過ぎ天王本郷に入る。船越水道を間にした船越と天王は八郎湯口の要地として体性を持ち、藩の湯漁の掌握と小鹿嶋（男鹿）を扼す重要な地点となつていた。やはり藩内十二社に数えられる天王の東湖八坂神社は牛頭天王が祀られ、毎年七月七日例大祭の「牛乗り」神事、対岸船越の「蜘蛛舞い」の統行人事が繰り広げられる。

船越は佐竹氏入部後に町割りになされ荒町が男鹿道と分かれる湯西街道の起点となつた。

た。享保十三年（一七二八）の「能代町絵図」に「男鹿海道」とある湯西街道は、正保四年（一六四七）「出羽一國絵図」によると、船越新田（男鹿市から払戸、福川、角間崎、鶴木、福米沢、野石、宮沢（以上若美町）の湖西部を経由して能代に通じていた。能代町へは宮沢から釜谷浜を通り能代市島町の願勝寺角の札所、御伝馬役所があつた所で大間越街道と合流した。これが浜道と呼ばれたもので、一方、内陸道もあつて、これは若崎を経由し、浅内、河戸川から長崎に達してそこで大間越街道と出合ったものである。

さて、船川や北浦に向かう男鹿道は、船越から西に里ほど進んで脇本に達する。脇本は、古代秋田城を中心に勃発した元慶の乱の際

